

「迷惑施設」と行政に対する信頼 —神奈川県藤沢市大清水浄化センターの事例から—

杉崎羽紗（靄理恵子ゼミナール）
HS21-1107F

論文の目次

第1章	はじめに
第1節	研究動機
第2節	研究の目的
第3節	研究方法と構成
第2章	用語の確認と先行研究の整理
第1節	用語の確認
第2節	先行研究の整理
第3章	文献調査から見る藤沢の姿
第1節	藤沢市の概要
第2節	地元新聞から見る藤沢市の変遷 (1954年から1982年)
第3節	議事録から見る 反対運動のそのあとの関係 (2014-2023年と2024年傍聴)
第4章	フィールドワークから見る 公共施設と住民との関わり方
第1節	藤沢市 大清水浄化センター
第2節	横浜市 西部水再生センター
第3節	そのほかの施設
第5章	考察
第1節	し尿処理のしくみの変化
第2節	処理場建設を進めた背景
第3節	住民から見た合意形成の意味
第4節	信頼構築のための要素
第6章	おわりに

注

参考文献・参考URL

論文の要旨

1.1 はじめに

本研究の目的は、自治体が運営する「迷惑施

設」の1つである下水処理場と下水道に関わる歴史を明らかにすることを通して、「行政への信頼」という視点から住民と行政との関係性がいかに構築されたかを分析することにある。具体的には、藤沢市大清水浄化センターを研究対象に文献調査やフィールドワークを行い、行政と住民との関係性を記述する。

1.2 分析方法

N・ルーマン（1973[訳1990]）によって論じられた「信頼」を参考に、本稿では「行政に対する信頼」の定義を「科学的、技術的な詳細な知識や情報がない、または自身が直接その事業の運営に携わらなくとも、行政の行う事業を利用すること」とする。

文献調査では、藤沢市史、地元新聞（湘南新聞と湘南毎日新聞）と施設の近隣住民との会議議事録を用いて藤沢市がたどった下水道に関する歴史を見る。また、フィールドワークでは下水道施設の職員へのインタビュー調査と、大清水浄化センターと北部環境事業所で行われているPRイベントでの参与観察を行う。

前述の調査結果と「行政に対する信頼」を念頭に置き、考察を述べる。

2. 藤沢市下水道事業の歴史

昭和30年代以前では個人間でのし尿処理の関係が築かれていた。昭和30年代からはオリンピックに伴い市による下水道事業が開始し、下水道が整備され始めた。

しかし、高度経済成長の人口増加と工業化に伴い、全国的にも公害問題が多発する中、藤沢市で

も生活環境の悪化が生じていた。このため、下水処理施設を建設する必要に迫られていた。

だが、1970年代に大清水浄化センターを建設する際、近隣住民からの反対運動を受けた。当時の反対運動を率いていたのは、専門家であった。

市と住民との合意形成が模索される中、反対派と市は協定を締結した。この協定により、反対派は市に対して大清水浄化センターの運営に関わる「全て」に関わる権利を得た。

3. 施設職員へのインタビュー

施設の運転当時を知る職員を含む、大清水浄化センターの施設職員の方々にインタビューを行った。

施設職員らは、合意形成後も施設へのマイナスイメージや相互理解に大きな課題があったと語る。また、締結した協定も施設を運営していく上で不自然な内容のものでもあった。

施設がこれらを解決のために最も初めに行った取り組みが施設を直接見てもらうことであった。そのために、近隣住民が訪れやすいPRイベントの開催や小学校の社会科見学など体験を通して、マイナスイメージの払しょくや施設への理解を図っていったことを語られた。

この様な努力と近隣住民との交流の場での説明と説得を経て、市と住民は協定を廃止したと語る。職員はこの廃止を肯定的に受け止めている。

また、職員の施設見学に対する意識は高く、「相互理解につながるような対話や見学が一番効果的だと思う」「大勢が見学に来てくれればいい影響が出るだろう。逆にいい影響を与えられるようなことをしないといけないということ」と語る。

4. 考察と結論

文献調査から、施設建設当初、人々が下水道事業に対して親しみを持っていなかったことが分かる。そのために、信頼に発展せず、基礎協定という強い権利を得る形になった、と解釈できる。

また、インタビュー調査より、施設職員には実際の体験を通じた住民との相互理解を意識していたことが伺える。なぜならば、反対派との合意形成がなされた後でも、反対派と施設の対立は存在していた。このことから、建設当時に行われた合意形成は、住民が心から施設に納得したのではなく、下水道が生活に喫緊で必要であったがゆえの形式的なものであったと考えられる。つまり、慣れ親しみによる信頼を形成する余裕がなかったゆえの強引な合意形成であったと言える。このことを当時から施設側は認識していた。そのために、施設の実際を知って、慣れ親しんでもらうことに注力した。

以上のことから結論として、下水処理施設は「迷惑施設」として、マイナスイメージを持たれやすい。しかし、PRイベントや小学校の課外学習での見学等の仕組みが存在していることで、施設が人々の理解を得るために重要な役割を果たしているといえる。

よって、下水道やその処理施設には、人々が直接施設を体験し、親しみを持てる交流を続けていくことで、下水道やその処理施設に親しみを持つ人間を作り出し続け、信頼関係を構築しているといえる。

主要参考文献

- 足立重和 (2001) 「第六章 公共事業をめぐる対話のメカニズム—長良川河口堰問題を事例として—」 舟橋晴俊編 (2001) 『講座 環境社会学第二巻—加害・被害と解決過程—』 pp145 - 176. 有斐閣
- 中西準子 (1980) 『都市の再生と下水道』 日本評論社
- 中西準子 (1983) 『下水道 水再生の哲学』 朝日新聞社
- N・ルーマン (1973) (大庭健・正村俊之介訳 (1990) 『信頼—社会的な複雑性の縮減メカニズム—』 . 株式会社勁草書房